

ハワイ在の三線について

園 原 謙

(沖縄県立博物館)

In Relation to Sanshin Research in Hawaii

KEN SONOHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

1. はじめに

1999年11月29日から12月6日までハワイへ行く機会を得た。目的はホノルル美術館(Honolulu Academy of Arts)からの贈呈される資料の確認及び資料搬出の立会いと、同館主催の資料贈呈式への参加であった。

この贈呈される資料とは、同館が助成したジョージ・H・カー博士の「琉球列島遺跡調査」(1960~1962)の成果品である考古資料約6000点のことである。11月30日に催された贈呈式典には当館から大城将保(沖縄県立博物館長)と通訳として筆者が参加した。

実はこの出張には、もう1つの大きな目的があった。ハワイへの沖縄移民に係わる調査を行うことである。

沖縄から最初のハワイへの移民が那覇港を発ってオアフ島のホノルルに向かったのは、1899年(明治32)12月5日のことであった。一行は当山久三の斡旋によるもので26人のウチナーンチュが翌年1900年1月に新天地ハワイの地を踏んだのである。ちなみに、この年より遡ること32年前の1868年(慶應4)5月、日本人初のハワイ渡航が行われた。

沖縄系移民にとっての1世紀の節目の年は、2000年1月になる。2000年1月8日には沖縄系移民100周年記念の盛大な式典が挙行される計画だと聞く。この式典は、ハワイ沖縄連合会(Hawaii United Okinawa Association)とハワイ州政府による実行委員会の主催によるものだという。

この記念すべき節目の年にあたり、沖縄県立博物館も移民に関する特別展を計画することとなった。99年6月ロスアンジェルスにある全米日系人博物館(Japanese American National Museum)から巡回展受け入れの要請があったことによる。この巡回展は、同館が3年前からハワイやロスアンジェルス、ワシントンD.C.で開催している「弁当からミックストプレイトまで」(原名“From Bento to Mixed Plate”)という展示会である。ハワイへの日系移民初期時代から現在にいたるまでの労苦と栄光の歴史を概観し、今日の日系移民の社会的活躍まで含まれる日系移民たちの1世紀間のプロフィールのような展示会で

あり、世界に向けて彼らの気概を示す展示会でもある。

この巡回展を引き受けるにあたり、当館自身の企画を組み込んだ特別展を計画したいと考えた。題して「日系移民1世紀展—From Bento to Mixed Plate」(仮称)。2部構成の展示を予定している。第1部は米国からの巡回展資料による展示。第2部は当館のオリジナルの展示構成を考えている。この2つめの展示は、当館で開催する以上、「沖縄発の移民」を紹介する展示にしたいと考えたのである。その中で、海外移民地における沖縄文化のシンボリックな存在としての三線を題材に展示コーナーを設ける必要を感じた。

本稿は短時間の調査であったが、沖縄で家宝として扱われる三線が移民地ハワイでも貴重な沖縄文化を象徴する工芸品として大切に扱われている事実に鑑み、ハワイにおける三線や関連調査など三線流出の背景と筆者が調査を行った3名の沖縄系移民者が所蔵する6丁の三線を紹介することにしたい。

2. ハワイに流出した三線とその調査

ハワイに三線が渡ったのは、やはり沖縄移民と時期を同じくする。ハワイ移民1世など、初期の開拓移民にとって、プランテーション労働は大変な労役であった。初期の移民は故郷への仕送りを目的とするための、いわゆる「出稼ぎ移民」であった。一攫千金を狙った移民の夢は現実的には大変厳しいものがあったようである。

当時（明治末期）の労働の日当は10時間労働で男性が約70セント、女性の場合は約50セントであったとされる^(注1)。したがって、1ヵ月26日労働で男性は18ドル、女性は12ドル50セントが基準となっていた。当時の物価の目安がある。50セントで卵が15個買え、鮭缶1個が1ドルの時代であった。そのような中で、心の支えと慰めは故郷に思いを馳せることのできる歌三線に興じることだけであったのだという。

池宮喜輝はその著書『琉球三味線寶鑑』(1954) の中で、昭和10年頃首里人で屋部憲通という人が首里の名家の三線を買い集め、ハワイに売り込んだという話を紹介している。屋部がロスからの帰りにハワイに立ち寄ったころ、同地では三線が大変人気の品になっていたことを知り、そこで沖縄から輸出しようと考えたわけである。そこで、首里の名家などに伝わる三線を買い漁り、高価な値段で売りまくった。ハワイにはその需要が多くあつたのだ。一体どれほどの三線がハワイに渡ったかは不明であるが、後年池宮の調査した時点では約4千丁の三線があったとされる。

当時、池宮は沖縄の貴重な文化遺産である三線の流出について立腹し、屋部に会ってその所行を正そうと考えていたようであるが、その機会を失してしまったようである。しかしながら、池宮も指摘するとおり、結果的には沖縄に所在しないで良かったことになる。ハワイをはじめ米本国や日本本土（東京・大阪地方）の地で大切に守られた（疎開された）

ことによって、多くの貴重な古三線が沖縄戦の戦禍から免れることになったのだ。このことは文化財保存の上で特筆されることである。東恩納寛惇のことばを借りれば、「琉球文化の疎開」がそこにはあった。戦勝国ハワイに沖縄の貴重な文化財が避難されていたことに、歴史の皮肉といいたずらを感じずにはいられない。

戦後ハワイには約4千丁の三線があったと池宮は指摘する。参考までに沖縄本島には5千丁の三線があったという。1952年（昭和27）1月から開始された池宮を中心とした審査委員会による三線調査によると、ハワイにおいて合格品として選別された古三線は、表1のとおりである^(注2)。

表1 ハワイの三線所在状況

島 名	三線 現存数	内審査合格数
オアフ島（ホノルル市）	3, 500丁	105丁
ハワイ島（ヒロ市）	280丁	67丁
カウアイ島（ワイルク市）	200丁	60丁
計	3, 980丁	232丁

その時の審査基準は、つぎのとおりである。

- ①用材が黒木（リュウキュウコクタン）であること。
- ②竿に接ぎがなされていないこと
- ③全体の均整がとれたもの
 - 天（面）、仁（竿）、爪など全体のバランスがとれたもの
 - 野面の波状がないこと
- ④地（心）の削り方、作者のサインの有無を確認

以上の4項目の審査基準に基づき最終的な合否が決定されることになった。その中には、名器であっても心が接がれたことにより、将来狂いが生じる懸念のため惜しくも落とさざるを得なかったものもあったとされる。

この調査はハワイ、ロスアンジェルス、東京方面、大阪方面、沖縄本島の5カ所で実施されており、調査された三線の件数は9,440丁にのぼった。うち、既述の審査基準に則して合格した三線の数は362丁^(注3)で、合格率は2割6分の狭き門になった。合格した三線の地域ごとの数は、ハワイ232丁、ロス2丁、東京方面5丁、大阪方面38丁、沖縄本島85丁となっており、いかにハワイに三線の良器が流れたかを裏付けることになった。

3. ハワイから帰ってきた三線

①健堅与那という三線

1998年（平成10）に当館の収蔵品のひとつに加えられた寄贈の三線がある。この三線は一名「健堅与那」とよばれる。かつてあったとされる由緒書によると、伊江王子が尚育王から拝領したものと伝えられる。この三線は、志多伯開鐘という三線と対をなしていた。伊江家から高安朝常（首里高安殿内）に譲渡され、1936年（昭和11）にはハワイ在の三線師匠の仲真良金にわたり、米本国に渡った仲真からロスアンジェルス在の屋宜盛蒲が譲り受けたものという。屋宜氏は95年に他界したが、琉球三線楽器保存育成会の島袋正雄会長や同会事務局長比嘉常俊氏、ロス在の中谷夏子氏の仲介の労により子息の屋宜盛次氏から当館へ寄贈されることになった三線である。

この三線と対であったといわれる志多伯開鐘は、琉球政府文化財保護委員会によって1955年（昭和30）に本県で初の工芸品として特別重要文化財に指定された3丁の三線のうちのひとつである。したがって、当館は県指定クラスの大変貴重な三線をご寄贈いただいたことになる。

②江戸与那という三線

戦後間もない頃ハワイから帰ってきた三線がある。東恩納寛惇が東京で発見した三線である。この三線は東恩納先生が1939年（昭和14）5月に東京山手の古書市で発見し、後日「江戸与那」として知られる名器であることが判明した。東恩納寛惇の「三味線供養」によると、この三線には付属品としての収納箱がついていた。2丁一対の収納箱には箱書きはないが、奉書にお家流の墨痕鮮やかに記された貼付された詞書があり、そこには「安政三年丙辰（1856）八月廿三日、琉球三味線二挺、浦崎親方進上、玉里大奥」とあったとされる。浦崎親方政種は琉球王府の年頭使者として安政二年五月廿三日、上陸、翌年九月廿四日鹿児島を立って帰国の途についている。玉里御殿（島津邸）で帰国に際しての演奏後に三味線を献上したものであろうと東恩納は推測する。「箱の表に献上品の趣が書記していないだけに、却って臨時の御所望であった事も知られ、従って尋常一様の品物でなかつたことも知られる」と推理する。

薩摩の玉里大奥を出て東京の骨董市に投出されるまでの数奇の運命に思いを馳せ、その三線の靈を慰めようという趣旨で三味線供養祭を営もうという話しになった。多年荒廃のままになっていた首里城南殿に修理を加えて、同年8月5日に南殿において三味線供養を兼ねた三線展が開催されることになった。「江戸与那里帰り」に因んだこの展覧は、当初江戸与那の供養を兼ねることが目的であったが、この際ということになり首里那覇の門外不出の名器約50丁が展示される盛大な三味線祭（展示会）へと発展することになった。こ

の展覧の企画は池宮喜輝と郷土博物館主事であった島袋源一郎によるものであった。展示会終了後、江戸与那は東恩納寛惇から沖縄県に寄贈され、郷土博物館の収蔵資料のひとつに加わることになった。

この話には後日談がある。実はこの三線は戦後行方不明になってしまったのである。ところが池宮喜輝がハワイから米本国へかけて演奏旅行の際、ハワイで江戸与那と邂逅することとなった。沖縄戦の当時、首里城に一番乗りした沖縄出身の二世兵が博物館から持ち出したことによるものであった。沖縄戦当時米軍の一員として参戦した沖縄出身2世たちも、1世から聞かされた三線を戦利品として持ち帰ったのである。この三線はハワイから返還され、1953年（昭和28）に当館の前身の沖縄民政府立首里博物館に寄贈され、1956年（昭和31）に琉球政府重要文化財として指定されることになった。

③富盛開鐘という三線

現在、沖縄県には県指定有形文化財（工芸品）の三線が20丁ある。琉球政府時代の琉球政府文化財保護委員会によって指定された三線が11丁。その後、沖縄県教育庁文化課による1989年（平成1）から1992（平成4）年まで4ヶ年間実施された「県内所在琉球三味線調査」に基づいた612丁^{注4)}の中から厳選された9丁の三線が指定に加えられ、合わせて20丁になった。これら沖縄県指定有形文化財の中にはハワイから渡ってきた三線がもう1つある。

1986年（昭和61）沖縄県立芸術大学へ寄贈する目的で譲渡された「富盛開鐘」とよばれる真壁型の三線がそれである。この三線は沖縄系移民2世でホノルル在の仲宗根盛松氏が戦前那覇で購入し、ハワイに渡った三線という。同氏から首里在の稻嶺盛保氏が執拗に所望し「ウン万ドル」で譲渡されることになった。そのあたりのエピソードについては宜保榮治郎著の『三線のはなし』に詳述されているのでここでは省略する。この三線は仲宗根から稻嶺に県立芸大に寄贈する目的で譲渡されることになった。1994年（平成6）に県指定に指定されたこの三線は旧所蔵者の意志に基づき現在沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に所蔵されている。

4. 今回調査した三線

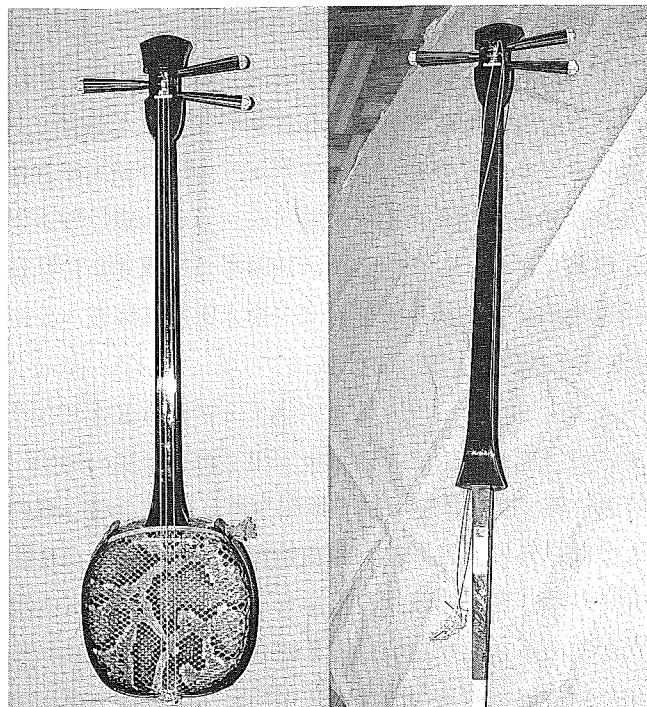
今回2日間しか調査の時間がなかったが、池宮喜輝が約半世紀も前に調査した三線について調査することができた。また、それ以外に「戦災で行方が分からぬのかあまり話題に上らない薄幸の三線」として紹介される「豊平開鐘」の銘をもった三線を調査する機会に恵まれた。この三線の真偽はいかがであろう。6点の三線を紹介することにする。

①三線 豊平開鐘



型 名：真壁型
全 長：77.4cm
心の長さ：21.5cm
糸蔵長さ： 3.3cm
糸 藏 幅： 1.5cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の右側に「豊平開鐘」
の朱書、後に薄くなっ
たので加筆したという。
心に接ぎあり
所 有 者：Keith K. Nakagane

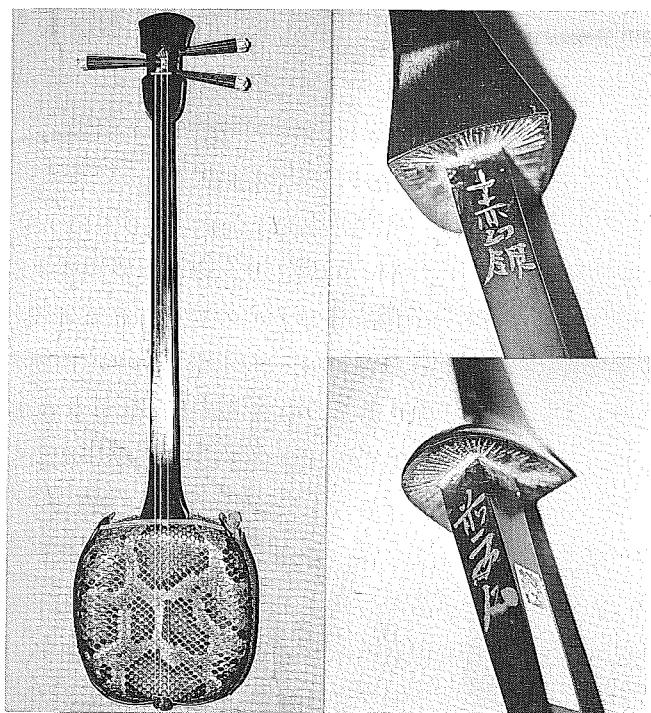
②三線 尾白真壁型



型 名：真壁型
全 長：78.8cm
心の長さ：21.8cm
糸蔵長さ： 3.6cm
糸 藏 幅： 1.4cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：幸地亀千代が太鼓判を
押した三線で、開鐘以
上のものであるといわ
れたという。富盛開鐘
の旧所蔵者のもので、
この三線が一番のご自
慢である。

所 有 者：Harry S Nakasone

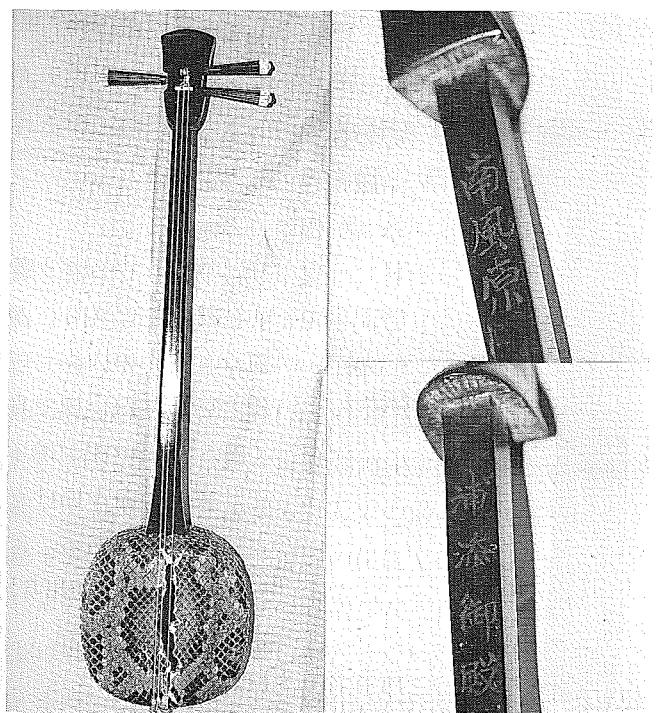
③三線 真壁型



型 名：真壁型
全 長：78.5cm
心の長さ：22.5cm
糸蔵長さ： 3.2cm
糸 蔵 幅： 1.3cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の表に「赤嶺」裏に
「前之山」の朱書きが
ある。

所 有 者：Harry S Nakasone

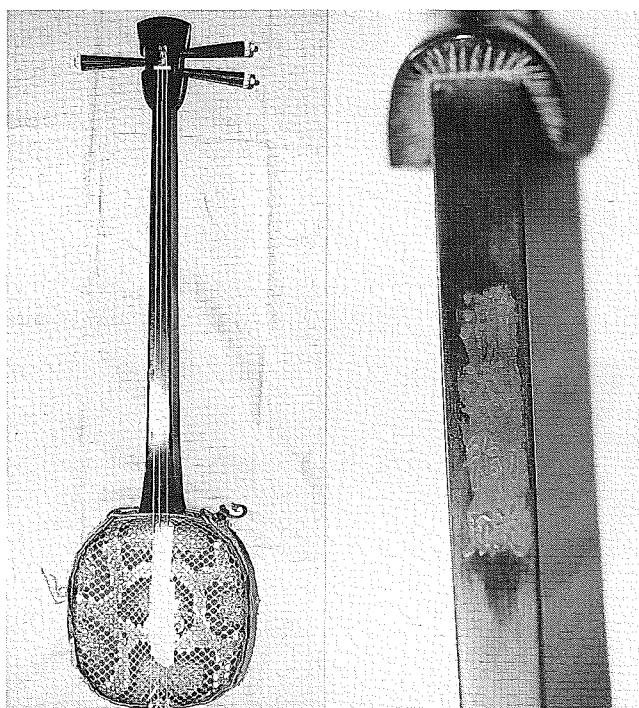
④三線 南風原型



型 名：南風原型
全 長：78.0cm
心の長さ：21.5cm
糸蔵長さ： 3.1cm
糸 蔵 幅： 1.1cm
特記事項：心の表に「南風原」裏
に「浦添御殿」の朱書
きあり。波之上の佐久
本三味線店で50年代に
購入したという。

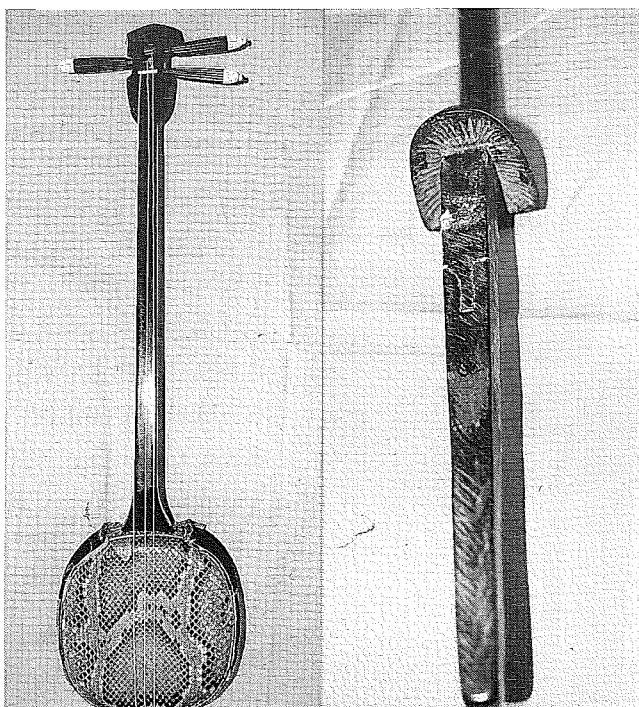
所 有 者：上原政子

⑤三線 南風原型



型 名：南風原型
全 長：77.4cm
心の長さ：21.2cm
糸蔵長さ：3.2cm
糸 蔵 幅：1.0cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の裏に「浦添御殿」
の朱書きあり。前述の
三線と兄弟三線という。
佐久本三味線店からハ
ワイ・コナの嘉数さん
が購入したものを62年
頃に譲り受けた。
所 有 者：上原政子

⑥三線知念大工型



型 名：知念大工型
全 長：77.5cm
心の長さ：21.8cm
糸蔵長さ： 3.3cm
糸 蔵 幅： 1.3cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心に接ぎたしあり。源
河ウェーキの口直し三
線といわれた三線で良
く鳴る。火事の時に鳴つ
て、家人の命を助けた
という伝承がある。ヒ
ロの呉屋氏（国頭出身）
から購入。
所有者：上原政子

5. むすびにかえて

楽器に係わる文化財指定は国や都道府県では極めて稀である。工芸品としての楽器指定はこの三線以外皆無といってよい。^(注5)

三線の文化財指定の背景には、沖縄の人々の心に共鳴する存在としての三線がある。この楽器は、歴史的には旧士族層の教養の器楽で用いられ、琉球芸能に不可欠の花形楽器になった。近世になって平民百姓まで伝播し、同時に楽器を超えた、神聖さを有する「もの」として扱われることになった。また、個性豊かな琉球文化のシンボル的存在であることも付加しなければならない。戦時中、名器を秘蔵する人々は着のみ着のままにも係わらず、先祖の位牌と三線の棹だけは背負って、砲煙弾雨の中を逃げまどったというはなしもある。不幸をよぶ三線や、夜中にきなり鳴り出す三線、死後も三線を弾きにくる遊女愛蔵の三線のはなし、馬一頭と交換した三線など三線にまつわるエピソードは多くある。

沖縄の人々の三線に対する愛着はこれほど凄まじいものがある。三線は命の次に、いやもしかしたら命以上に大切なものかもしれない。この価値観は故郷から遠く離れた沖縄人の移民地ハワイにおいても同様であった。ボリビアでは、リュウキュウコクタンの代材として現地の鉄木のような堅木が使用されていると聞く。ハワイにも三線同様の撥弦楽器ウクレレがある。その用材として使用されるのがコアの木で、乱獲のため最近では稀少木となっていると聞くが、ボリビア同様に地元で調達できる用材、例えばコア材による三線が作られていれば、文化受容の面から大変興味深いものがあると考えていた。しかしながら、それはなさそうである。移民先では故郷への思慕が強い分、その気持ちは沖縄に居住する人々以上に母県文化への傾倒が凝縮してみられる。コア材の三線なんて一蹴されるかもしれない。疎開された沖縄文化の純粹結晶が移住地には息づき、新たな沖縄文化の創造を行っている。この調査を通して沖縄の文化と心を再認識することができた。

謝 辞

今回の調査ではハワイ滞在中の仲宗根盛松先生と渡具知光子先生に大変お世話になった。また、ハワイ沖縄センターのボニー・ミヤシロさん、ホノルル在のKeith K. Nakaganeku さん、ヒロ在の上原政子とその娘さんKathy Y. Okunamiさんにもお世話になった。とくに、仲宗根・渡具知両先生には、ともにヒロ市まで調査にご同行いただいた。三線に愛着する心と沖縄人としての誇りに敬意を表するとともに心から感謝を申し上げる次第である。両先生は、沖縄の伝統文化である古典音楽と琉球舞踊の伝承に関わっていらっしゃる。先生方の益々のご活躍とご健勝を祈念しつつ、文末ではあるが、心から感謝申し上げ御礼に代えさせていただきたい。

また、仲宗根先生をご紹介いただいた琉球三線楽器保存育成会長の島袋正雄先生には、

お口添えいただいたことに心から感謝申しあげる。

注 記

- 1 明治末期の移民労働者の日当は『沖縄ハイ移民一世の記録』(40p) の記載による。
- 2 池宮喜輝『琉球三味線寶鑑』(35-36p) の「審査報告」の情報に基づき表を作成した。
- 3 各地域で合格した三線の合計は池宮の著作では「363丁」同掲書 (37p) と記載されているが、各地域の合格数の累計は362丁となるので、その数値を筆者は採用した。
- 4 沖縄県教育委員会編『沖縄の三線』の調査概要に記載された数値による。
- 5 園原謙「沖縄県指定有形文化財としての三線」(28p) の「国・都道府県における文化財としての楽器の指定状況」に基づく。

参考文献

- 池宮喜輝『琉球三味線寶鑑』東京沖縄藝能保存會 1954年（昭和29）7月
沖縄県教育委員会編『沖縄の三線』沖縄県教育委員会1993年（平成5）3月
宜保榮治郎『三線のはなし』ひるぎ社 1999年（平成11）7月
園原謙「沖縄県指定有形文化財としての三線」『特別展三線のひろがりと可能性展（図録）』
1999年（平成11）7月
鳥越皓之『沖縄ハイ移民一世の記録』中公新書 1988年（昭和63）11月
東恩納寛惇「三味線供養」『東恩納寛惇全集5』琉球新報社 1978年（昭和53）12月
東恩納寛惇「琉球文化の疎開—三味線の分布と文化的命脈」
『東恩納寛惇全集8』琉球新報社 1980年（昭和55）8月